

風時はブルーム式、無風・弱風時はパフ式が上げられているため、第Ⅰ期事業の環境影響評価においては、ブルーム・パフ式を使用し、地形による影響を考慮して、修正を加え予測を行っています。

23) 第Ⅱ期事業での「戦略的環境影響評価」とは、何を目的とし、どのような内容のものですか？

【回答】

戦略的環境影響評価は埼玉県戦略的環境影響評価実施要綱（H14.3.27）に基づき、環境に著しい影響を及ぼすおそれのある道路、鉄道、廃棄物処理施設などの計画等の案を作成する段階において、計画策定者が、社会経済面の効果や環境面の影響を予測評価した内容を県民等に開示し、情報交流をすることにより、幅広く環境配慮のあり方を検討するものです。

第Ⅱ期事業での「戦略的環境影響評価」では、廃棄物処理施設及び工業団地の整備事業計画の検討において実施したものです。

<環境測定について>

24) 第Ⅰ期事業はクローズドシステムであり排水が出ないことが前提でしたが、その排水から複数の環境汚染が出たことについて、その根本的理由は？また、各企業に対してどのような排水の管理をしていますか？

【回答】

工場からの鉛の流出がありました。これは、貯留ヤード棟に堆積したスラグに付着していた水砕水（溶融スラグを冷却、凝固させるための水＝鉛を含んでいます。）が、降雨時に貯留ヤード棟前面の雨水排水溝へ流れ出て、鉛が工場外に流出したものです。

事業者が対策を講じ、現在、鉛等が雨水排水口へ流出することはありませんが、今後は、このようなことが二度と起こらないよう、資源循環工場各社に対して、徹底した管理体制を求めるとともに、監視体制を強化しています。

25) 複数の高温焼却施設の排気中での重金属類や複合合成物質に対しての測定方法、また、周辺大気測定にどのように反映させていますか？

【回答】

周辺大気測定は、運営協定で定められた二酸化硫黄、二酸化窒素、ダイオキシン類など5項目について、7か所の地点で年4回調査を実施しています。

また、平成18年度からホルムアルデヒド、シアン類、水銀、アスベスト、イソシアネート類、アクリロニトリルの6項目の化学物質について、周辺大気測定地点と同じ7地点で、年1回実施しています。

26) 人間は有害化学物質を体内に蓄積していきます。周辺住宅地において大気からの蓄積量のわかる松葉による測定や土壌測定が行われていないのはなぜですか？

【回答】

資源循環工場では、事業実施段階での環境影響評価のほか、彩の国資源循環工場事業化検討委員会及び埼玉県廃棄物処理施設専門委員会の審議を経た上で、地元住民組織・寄居町・小川町・立地企業・埼玉県の間で運営協定を締結し、立地企業には法令の基準を上回る厳しい基準を遵守させるとともに、埼玉県による工場稼働前からの継続的な環境調査を行い、環境対策に万全を期しております。

さらに、測定・検査の結果につきましては住民の皆様公表するとともに、住民監視システムを導入し、透明性の高い運営管理を行っています。施設稼働に伴う大気への影響については、十分これからも配慮してまいります。